

出会いを大切に

白鷗中学校 三年 細田 遥夏

私は、今年で十五歳になる。この十五年間を思い返してみると、とても濃い思い出ばかりだ。とはいえ、良いことばかりではなかった。

小学生の頃、みんなに好かれてたくて誰に対してもいい顔をしていた。その結果、大切な友達もできたが、距離を置かれた事もあった。当時は、その一つ一つを重く受け止めてしまい、精神的にボロボロな日々が続いていた。ここから私はどう立ち直ったのかは今も覚えていないが、親や先生方の支えがあり、前向きになれたのだと思う。そして小学六年生になり、ある先生にこんなことを言われた。

「もつと自分を出していんだよ。」その一言に、今まで張っていた気が緩んだ。当時は、無意識に周りに気を遣い、知らぬ間に我慢が溜まっていたのだろう。

この時、自分について考えてみた。だが、何度考えてみても、みんなに好かれたい思いや、気を遣う行動が自分だ。生まれもった性格なのだと。これは自分だけが持っているものだからこそ伸ばしていきたいと思った。また、芯のある強い心を持ちたいと決心した。

中学生になり、新たな環境と向かう。初日のクラス内は、あまりにも静かで、休み時間も同じ小学校だった子で固まって話していた。このソワソワさを六年ぶりに体験し、自分が声をかけなければと思った。だが、Aさんが私より先に話しかけてくれた。そしてAさんをきっかけに、次第にクラスが和んだ。「なんて勇気のある子なんだろう。」と胸を打たれた。また、中には勉強を教えてくれる子、ちょっとしたことにも、「ありがとう。」と言ってくれる子、みんなの気づかないところで掃除をしている子、周りを笑わせてクラスを明るくしてくれる子。みんな違う素敵なところが山ほどあった。

私は周りの人をよく見る。行動がその人を表していると思うことが多々あるからだ。いろんな人の行動を見つけては家に帰り、夕食時にその事を家族に話している。時には愚痴を話すこともある。だいたい相手が悪いに決まっているというふうには話すが、母はそこを突き、自分の反省点を振り返らせてくれる。家族に話すことが自分を見つめ直す時間になっていると思う。おそらくそれが成長へとつながっているのだと感じている。

四月から五月は、母に話したい話題がいくつも出る。学年が上がりクラスが変わると、それまでに話したことのない子とも出会う。そうすると、その子がどんな子なのだろう、もつと仲良くなりたいと思う。そのうち「こんな子なんだ。」と魅力がわかり楽しくなり、母に饒舌に話してしまう。

また、行事が近づくと、みんなのいつもとは違う意外な一面が見られる。面倒くさそうにしつつも、みんなでやる時には協力してくれたり、みんなに声をかけてチーム

を引っ張ってくれる姿、見ていて、「いいところあるじゃん。」と、見方が変わる。心の奥底から「くう」と込みあげてくるものがある。

学校の友達とは、いつも他愛もない会話ばかりする。授業前になると時間割を見て「勉強か。」と溜息をつく。やる気が出なくても授業が始まると、先生はよく世間話をしてくれる。それがおもしろくてまた笑い、授業にあつという間に引き込まれてしまう。それほど先生達は熱心で全力でサポートしてくれる。

学校が大好きと思える環境を作ってください。親や先生、仲間に深く感謝したい。大人になるにつれ、他人との関係を考えすぎて生きづらさを感じる人もいると思う。でも、あきらめないでほしい。日々の生活の中で人は支えあっている。そう感じなくても、どこかで支え続けてくれている人がいる。一人で抱え込んでしまっている人は、いっこうに出口は見つからない。でも、人に頼ることで煮詰まった思いはきっと軽くなるはずだ。助けてくれた人を、私が助ける番だと思つて支えたい。